

## 【学位論文審査の要旨】

### 1. 本論文の課題

日本の社会がグローバル化し、日本の企業や組織の中で留学生が活躍する場が増えてきた。報道などではグローバル企業の中で英語が公用語になっているところもあるなど取り上げられているが、こうした報道は逆の観点から見れば、日本の企業・組織では日本語が今でも中心的なコミュニケーション手段であることを示している。

韓国人学習者の中には、高度な日本語を用いて企業での活動を行なう者が多くなっているが、自分たちの発する日本語の音声・言語行動・非言語やパラ言語行動に何らかの問題がないか、以前より意識するようになってきたという研究もある。日本語と韓国・朝鮮語は他の言語よりも類縁性があるゆえに、商取引などプレゼンテーションを含む複雑な交渉において、韓国人の言語特徴により、マイナスの印象を日本人が抱かないか、韓国人学習者は気にしている。関（2004）によると韓国人日本語学習者は、日本語の様々な学習項目の中でも特に音声に関して非常に高い学習ニーズを持っていると述べている。韓国人は、自分自身の感情を隠さず素直に表現することが特徴だと言われているが、社会心理学者である한덕웅（ハントクウン、HAN DOK UNNG, 2003）は、韓国人の性格について行なった成人および大学生853名のアンケート結果から「남에게 자기 인상을 실제와 달리 좋게 보이려는 성향（筆者日本語訳：他人に、自分の印象を実際より、よく思われようとする性向）」があると述べており、韓国人は他人の評価を気にしていることが示唆されている。

ところで、私たちは日々誰かと話す時、相手が話す内容だけでなく、外見や声のように目から見える姿や耳から聞こえる音等からの情報を収集した上で、総合的に相手を判断し、評価する。このような評価は時間の計画や他の要素によって変動することもある。はじめには目から見える要素である外見や容貌からの情報により判断していたことが、話し始めると声やジェスチャー等の要素から影響を受けることもあり得る。また、場面によって変わることもある。例えばビジネス場面などでプレゼンテーションをするような公的な場面での評価と、友達同士の会話などの私的な場面での評価には違いがあるだろう。

これまでの日本語教育分野では学習者の言語運用に関する評価研究は多くなされてきた。しかし、言語運用能力だけに焦点を当てた研究は、全体の評価についてみることができず、正当な全体的評価とはならないこともある。設定された場面においてさまざまな要素を含めた全体的な観点から評価を研究する必要がある。

黒野（2006）の報告によると、留学生が日本の大学生活において「授業で発表をする」際、もっとも日本語力の不足や問題を感じているという。誰かの前で話すことは、母語であっても緊張する可能性が高いことが一般的であろうが、留学生は母語でもない第二言語で母語話者および非母語話者の前で話さなければならない。このような状況が留学生には大きい負担になると考える。

それでは、日本語学習者が日本語によるプレゼンテーションを行なう際に、聞き手側は、プレゼンターの外見や容貌、声のトーンや発音、ジェスチャー等の情報をどのように判断

し、総合的な評価をするだろうか。

日本語母語話者（日本語教師）および日本語母語話者（非日本語教師）が日本語非母語話者を評価したものを比較した研究はいくつかある。しかし、韓国人母語話者や中国人母語話者などそれ以外の属性を持つ母語話者および非母語話者同士という評価の観点を持つ研究は少ない。また、印象に関する要素や発音に関する研究など一つ一つの要素について研究したものはあるものの、総合的な観点からの研究はみられない。

以上を踏まえた上で本論文では、韓国人日本語学習者に焦点を当て、韓国人日本語学習者が日本語によるプレゼンテーションを行なう際、聞き手側の評価の観点を総合的な観点から分析および考察する。また、聞き手側を、日本人日本語教師（以下、日本語教師）と韓国人日本語学習者（以下、韓国人学習者）の2つのグループに分け分析する。従来の研究は母語話者からの評価がほとんどであったが、近年JF 日本語教育スタンダードを利用した学習者の自己評価や学習者同士の評価にも注目されてきたことから、学習者同士の評価という観点も入れ、日本語母語話者である日本人日本語教師の結果とも比較を行なうこととした。

## 2. 本論文の構成

### 第1 序章

#### 1.1 本研究の背景

##### 1.1.1 プレゼンテーションに関する研究 1.1.2 評価研究

##### 1.1.3 言語・非言語・パラ言語研究

#### 1.2 本研究の目的 1.3 用語の定義 1.4 本論文の構成

### 第2 章 先行研究

#### 2.1 プレゼンテーションに関する研究 2.2 日本語学習者に関する評価研究

#### 2.3 韓国人日本語学習者に関する評価研究 2.4 本研究の位置づけ

### 第3 章 調査概要

#### 3.1 調査協力者

##### 3.1.1 プレゼンター 3.1.2 評価者 3.2 データ収集方法

##### 3.2.1 ビデオデータ

#### 3.3 分析方法

#### 3.4 データの信頼性検討

##### 3.4.1 探索的因子分析による結果 3.4.2 確認的因子分析による結果

### 第4 章 プレゼンテーションに対する評価の違いー日本語教師と韓国人学習者ー

#### 4.1 はじめに 4.2 目的

#### 4.3 プレゼンテーションに対する評価

##### 4.3.1 日本人日本語教師による評価 4.3.2 韓国人日本語学習者による評価

##### 4.3.3 日本人日本語教師と韓国人日本語学習者の評価の違い

#### 4.4 考察

### 第5章 「言語・パラ言語および非言語的特徴」に関する評価の観点

#### 5.1 はじめに 5.2 目的 5.3 質問紙

#### 5.4 日本人日本語教師による評価の観点

##### 5.4.1 項目別平均得点 5.4.2 因子分析

#### 5.5 韓国人日本語学習者による評価の観点

##### 5.5.1 項目別平均得点 5.5.2 因子分析

#### 5.6 日本人日本語教師と韓国人日本語学習者による評価の違いに関する考察

### 第6章 「対人印象」に関する評価の観点

#### 6.1 はじめに 6.2 目的 6.3 質問紙

#### 6.4 日本人日本語教師による評価の観点

##### 6.4.1 項目別平均得点 6.4.2 因子分析

#### 6.5 韓国人日本語学習者による評価の観点

##### 6.5.1 項目別平均得点 6.5.2 因子分析

#### 6.6 日本人日本語教師と韓国人日本語学習者による評価の違いに関する考察

### 第7章 プレゼンテーションに対する評価の結果が言語・パラ言語および非言語的特徴と対人印象に関する評価の影響

#### 7.1 はじめに 7.2 目的

#### 7.3 言語・パラ言語および非言語的特徴と対人印象に関する評価の分析

#### 7.4 「発表の良さ」に与える影響

##### 7.4.1 日本人日本語教師による結果 7.4.2 韓国人日本語学習者による結果

#### 7.5 「興味」に与える影響

##### 7.5.1 日本人日本語教師による結果 7.5.2 韓国人日本語学習者による結果

#### 7.6 「わかりやすさ」に与える影響

##### 7.6.1 日本人日本語教師による結果 7.6.2 韓国人日本語学習者による結果

#### 7.7 「慣れ」に与える影響

##### 7.7.1 日本人日本語教師による結果 7.7.2 韓国人日本語学習者による結果

#### 7.8 「資料」に与える影響

##### 7.8.1 日本人日本語教師による結果 7.8.2 韓国人日本語学習者による結果

#### 7.9 考察

### 第8章 言語・パラ言語および非言語的特徴の評価が対人印象評価に与える影響

#### 8.1 はじめに 8.2 目的

#### 8.3 言語・パラ言語および非言語的特徴と対人印象に関する評価

##### 8.3.1 言語・パラ言語および非言語的特徴に関する評価

##### 8.3.2 対人印象に関する評価の結果

#### 8.4 言語・パラ言語および非言語的特徴が対人印象評価に及ぼす影響

|                             |                       |
|-----------------------------|-----------------------|
| 8.4.1 日本人日本語教師による結果         | 8.4.2 韓国人日本語学習者による結果  |
| 8.5 考察                      |                       |
| 第9章 発音の評価がプレゼンテーション評価に及ぼす影響 |                       |
| 9.1 はじめに                    | 9.2 目的                |
| 9.3 調査の材料                   |                       |
| 9.3.1 質問紙                   | 9.3.2 発音に関する評価の結果     |
| 9.3.3 プレゼンテーションに関する評価の結果    |                       |
| 9.4 発音の評価がプレゼンテーションに及ぼす影響   |                       |
| 9.4.1 日本人日本語教師による結果         | 9.4.2 韓国人日本語学習者による結果  |
| 9.5 考察                      |                       |
| 第10章 発音の評価が対人印象に及ぼす影響       |                       |
| 10.1 はじめに                   | 10.2 目的               |
| 10.3 調査の材料                  |                       |
| 10.3.1 発音に関する質問紙            | 10.3.2 対人印象に関する評価の結果  |
| 10.4 発音の評価が対人印象に及ぼす影響       |                       |
| 10.4.1 日本人日本語教師による結果        | 10.4.2 韓国人日本語学習者による結果 |
| 10.5 考察                     |                       |
| 第11章 結章                     |                       |
| 11.1 研究目的ごとのまとめ             |                       |
| 11.3 評価の順位による一考察            |                       |
| 11.3.1 最高位の学習者              | 11.3.2 最下位の学習者        |
| 11.4 日本語教育への提案              | 11.5 今後の課題            |
| 参考文献                        |                       |
| 巻末資料                        |                       |

### 3. 本論文の概要

本論文の構成は上記のように11章からなっている。

第1章では、本研究の研究背景について述べた上で、研究課題を設定している。また、本研究で使われる重要な用語についての定義と整理を行なっている。

第2章では、先行研究を、プレゼンテーションに関する研究と評価に関する研究でまとめている。評価に関する研究は、英語教育と日本語学習者全体を対象としたものおよび韓国人日本語学習者を対象としたものを含む。また、言語・パラ言語・非言語に関する用語の定義をまとめながら本研究がそれぞれの先行研究とどのようなつながりを持つか、研究分野の中での位置付けを示している。

第3章では、本研究での調査概要と分析方法について述べられているが、この研究の根幹となる部分なので詳述する。

本論文では、韓国人日本語学習者の日本語によるプレゼンテーション場面を刺激ビデオとし、聞き手側の評価の観点を明らかにすることを目的としている。プレゼンテーションは、日本語学校の授業課題で、1) ジャージャー麺、2) チェジュ島、3) 古着屋、4) 日本のビール、5) 地球温暖化、6) モンというそれぞれ異なったテーマでの発表であり、全6つのテーマであった。調査協力者である韓国人日本語学習者6名は、在日年数が1年以上で全員上級クラスに所属しており上級学習者である。

2013年8月に都内にある日本語学校に在籍している韓国人日本語学習者6名の協力を得て刺激ビデオを作成した。これらの刺激ビデオを用いて、日本語母語話者の日本語教師40名（そのうち男性9名、女性31名）、韓国人日本語学習者40名（そのうち男性11名、女性29名）、計80名による評価の観点を調査した。

調査は、2013年10月から2014年7月までの間で行われた。調査を行なった場所は、都内にある大学および大学院、日本語学校の教室、韓国の大学の教室であり、プロジェクターを利用して刺激ビデオを視聴しながら質問紙項目にチェックをする方法であった。質問紙は、日本語学習者に対する日本語母語話者の印象形成について研究を行なった崔（2009）を参考に作成したものであり、言語・パラ言語および非言語的特徴に関する評価項目、プレゼンテーション内容に関する評価項目、対人印象に関する評価項目の3つの観点からなる。質問紙は3枚であり、51項目からなる質問項目は「正しい文法を使っている」というものに対して「全く正しくない(1)」「あまり正しくない(2)」「ふつう(3)」「やや正しい(4)」「とても正しい(5)」の5点法である。調査は、調査者と調査協力者の2名で行なうことが主であったが、複数の調査協力者が同時に行なう場合もあった。調査にかかった時間は、1時間30分から2時間程度であった。調査の手順は、1)調査同意書を読み調査協力者がサイン、2)調査の流れを説明、3)質問紙項目を確認、4)アンケート調査への回答、5)プレゼンテーションの順位づけ、6)調査協力者のフェイスシート記入（言語形成期や日本語学習者歴）の順で行なわれた。

上記のような手順で質問紙上の評価得点を得たが、その分析はプレゼンター個別の傾向ではなく、プレゼンター6名の結果を合わせ、全体の評価得点を用いて分析を行なった。評価者については日本語教師40名と韓国人学習者40名に分け、その差を検討した。

調査の結果分析にはIBM SPSS Statistics 22を用いた。まず、重みなし最小二乗法とプロマックス回転による因子分析を行なった。その結果を、次節以降に、日本人日本語教師の「言語・パラ言語および非言語的特徴」に対する評価の観点、「対人印象」に対する評価の観点、「プレゼンテーション」に関する評価の観点、韓国人日本語学習者の「言語・パラ言語および非言語的特徴」に対する評価の観点、「対人印象」に対する評価の観点、「プレゼンテーション」に関する評価の観点の順に分析を行なった。さらに、AMOSを用い、上記の因子構造について確認的因子分析で検証を行なった。

また、上記の「言語・パラ言語および非言語的特徴」に対する評価の観点、「対人印象」に対する評価の観点の因子分析の結果を用いて、これらの結果が、「プレゼンテーション」

に関する評価の観点に与える影響を探るため、重回帰分析を行なった。

以上のように、本研究は、韓国人学習者の日本語によるプレゼンテーションの際の言語と印象、プレゼンテーションに関する評価の観点を明らかにすることを目的としている。さらに、これらの結果から、日本語母語話者である日本語教師と、学習者同士である韓国人学習者の2つのグループのそれぞれの結果をまとめ、両グループ間の比較研究も行なっている。これまでの評価研究では、母語話者（日本語教師と非日本語教師）による評価が主であったが、本研究では学習者の評価を取り入れていることが、これまでとは異なる点である。

本研究における質問紙は、崔（2009）を中心に参考に作成したが、崔（2009）の質問項目の他に、プレゼンテーションに関する評価項目と発音に関する評価項目を新たに追加した。崔（2009）は初対面会話の研究であったが、本研究では韓国人日本語学習者のプレゼンテーション研究である。「発表内容」と「発音」、「言語・パラ言語および非言語的特徴」、「対人印象」に関する評価と、またそれぞれの影響について分析、考察したことが本研究の独自のものといえる。

本研究の軸となる評価観点は3つである。まず、「プレゼンテーション評価」であり、これはプレゼンテーションそのものが良いかどうかという評価である。次に、「言語・パラ言語および非言語評価」であり、耳から聞こえてくるプレゼンターの発する言語や目から見える非言語に関する情報を含むものである。最後に、「対人印象評価」であり、外見から感じる印象など、プレゼンターの全体から感じる雰囲気から感じられるものである。

さらにこれらの3つの軸に、「発音評価」も加えた。これまで発音が印象や評価に与える可能性について論じた先行研究はあるが、はっきりとした知見が得られていないため、本研究では独立した評価とし、発音評価が前述の3つの評価にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、第4章において日本語教師と韓国人学習者による、韓国人学習者のプレゼンテーションに対する評価の観点についてまとめた。まず、プレゼンテーションに関する評価項目である「良い発表だと思う。」「内容に興味がある。」「内容がわかりやすい。」「発表に慣れている。」「資料が適切である。」の5つについての日本語教師と韓国人学習者との評価結果を比較した。その結果、「資料が適切である。」項目以外の「良い発表だと思う。」「内容に興味がある。」「内容がわかりやすい。」「発表に慣れている。」の4項目に有意差が見られた。このことから、同じプレゼンテーションを見ていても、評価者の背景・属性が異なると評価には大きな違いがあり、プレゼンテーションを評価する際の認知構造に差異があることが示唆された。

第5章では、日本語教師の「言語・パラ言語および非言語評価」の分析結果から、【正確さおよび流暢さ】【非言語およびパラ言語能力】【プレゼンテーション向きの話し方】【会話ストラテジー】という4つの観点があることがわかった。一方、韓国人学習者の「言語・パラ言語および非言語評価」の結果からは、【正確さおよび流暢さ】【非言語および

パラ言語能力】【会話ストラテジー】という3つの観点があることが示されている。

このことから、日本語教師は、韓国人学習者が持っていない【プレゼンテーション向きの話し方】という評価観点を有することが示されている。つまり、日本語教師は、プレゼンテーションを見ているときには、話し方がプレゼンテーションに相応しいか否かを見ているということになる。しかし、この観点は韓国人学習者に見られなかった。

第6章での「対人印象評価」の分析の結果からは、日本語教師と韓国人学習者のどちらのグループにおいても、【社会的望ましさ】【活動性】【個人的親しみやすさ】という3つの観点があることが示された。この結果は、対人印象に関する研究である林（1978）、西郡（1997）、崔（2007, 2009a, 2009b, 2012, 2013）の結果と一致した。本研究の結果を先行研究に照らし合わせた結果、相手に対して抱く印象を形成する際には、同じ母語話者同士であっても、異なる母語話者であっても、場面が異なっている、かなり類似した認知構造を元に対人印象の評価がなされていることが示唆されている。「対人印象評価」は、Thomas（1983）がいうように、学習者の文法的な能力が充分でも談話能力が不十分な場合<sup>9</sup>は、言語運用能力が高くても対人印象が悪くなる恐れがあるため、重要な研究であるとされる。また、対人印象は独立的な要素ではなく、「言語・パラ言語・非言語・発音評価」「プレゼンテーション評価」からの影響も受けている可能性があることがうかがえる。よって、以上の3つの評価と、発音評価がそれぞれどのように影響を与えているかを明らかにした。これらについては、第7章、第9章に記されている。

まず、「プレゼンテーション評価」に与える要因について、第7章では「言語・パラ言語・非言語評価」と「対人印象評価」に焦点を当て、これらの結果が「プレゼンテーション評価」に与える要因を探った。

その結果、まず、日本語教師は、「内容に興味がある」「内容がわかりやすい」「資料が適切である」の3項目において、【社会的望ましさ】がもっとも影響を与えていた。つまり、日本語教師は、プレゼンターがまじめな人であり、信頼ができそうであれば、プレゼンテーション評価にも高い評価を与えていることがうかがえた。

一方、韓国人学習者は、「良い発表だと思う」「内容に興味がある」「内容がわかりやすい」「資料が適切である」の4項目において【個人的親しみやすさ】がもっとも影響を与えていた。つまり、韓国人学習者は、話しやすそうな人であり、魅力を感じるプレゼンターであるほど、プレゼンテーションへの評価を高くするということがうかがえた。

以上のことから、日本語教師は、個人的な魅力などのような主観性ではなく、社会的に望まれるかという観点を評価の基準としているのではないかと考えられる。これに反して、韓国人学習者は、個人的な印象を大事にしている傾向が見られた。

しかし、「発表に慣れている」の項目においては、日本語教師・韓国人学習者ともに、【非言語およびパラ言語能力】からの影響がもっとも強かった。言い換えると、プレゼンターの表情が豊かであり、身振り手振りで適切であるほど、発表に慣れている印象を与える可能性が高くなることになる。また、このことにおいては、日本語教師も韓国人学習者

も同じように感じることを示唆された。

最後に、日本語教師のみに、「良い発表だと思う」の項目においては、【プレゼンテーション向きの話し方】の影響がもっとも強い傾向がみられた。これは、プレゼンターが話す際に、スピードや間の取り方を適切に駆使しながら話すことにより、良い発表であると思わせることを示している。

以上のように、第7章の結果をまとめると、日本語教師は、プレゼンテーションを評価する際に、社会性を重視するのに比べ、韓国人学習者は、個人的な印象を重視することがわかった。韓国人は、自分自身の感情を隠さず素直に表現することが特徴と言われているが、このような背景が反映されたのではないかと考える。実際、韓国人の性格について研究を行った한덕웅 (2003) は、「남에게 자기 인상을 실제와 달리 좋게 보이려는 성향 (日本語訳：他人に、自分の印象を実際より、よく思われようとする性向)」と述べているが、これが本研究でも表れたのではないかと考えられる。

次に、「発音評価」が、「プレゼンテーション評価」に与える要因を探った第9章をまとめる。

日本語教師の結果では、「プロミネンス (卓立)」への評価が、「プレゼンテーション評価」の5つの全ての項目に影響を与えていた。これは、日本語教師はプレゼンターの発音のうち、プロミネンスを適切に使用しているということが、プレゼンテーションを評価するにあたりもっとも重要な要素であると考えられる。これに比べ、韓国人学習者の結果では、「アクセント」の評価が4項目に影響を与えていた。日本語教師のようにプロミネンスの評価が影響を与えている項目は一つにすぎなかった。

このことから、日本語教師は、プレゼンターの話しから、プロミネンス (卓立) が適切かという要素がプレゼンテーションを評価する要素となり、韓国人学習者は、韓国語とは異なる日本語のアクセントが正しいか否かが重要な要素になるのではないかと考えられる。

続いて、日本語教師は、プロミネンスの他に、長音の評価も4項目に影響を与えており、韓国人学習者は、摩擦音の評価が3項目に影響を与えていた。韓国語母語話者は摩擦音を苦手とすることがすでに知られている。それゆえ、日本語学習者同士で評価をする際にもこれが重要視されるのではないかと考えられる。

次に、「対人印象」について、第8章では「言語・パラ言語・非言語評価」が与える影響を、第10章では「発音評価」が与える影響を探った。

まず、第8章の「言語・パラ言語・非言語評価」が「対人印象評価」に与える影響については、日本語教師が【社会的望ましさ】を評価する際には、「プレゼンテーション向きの話し方」への評価がもっとも影響力を持っており、【活動性】と【個人的親しみやすさ】を評価する際には、「非言語およびパラ言語能力」への評価がもっとも高い影響を与えていることがわかった。このことから、日本語教師が韓国人学習者の印象について評価をする際には、話し方のスピードや間の取り方、表情が豊かであり、身振り手振りが適切であることが重要な要素であることが示唆された。



一方、韓国人学習者の対人印象の観点である【個人的親しみやすさ】と【社会的望ましさ】、【活動性】の3つの全てにおいて、「非言語およびパラ言語能力」への評価がもっとも影響を与えていた。このことから、韓国人学習者が韓国人学習者の印象について評価をする際には、表情が豊かであり、身振り手振りが適切であることが重要な要素であることが示唆された。ただし、以上の結果は、本研究の対象がプレゼンテーションという限定された場面に限られた結果であるとも考えなくはない。

次に、第10章では、「発音評価」が「対人印象評価」に与える影響を探った。日本語教師が【社会的望ましさ】を評価する際には、「イントネーション」への評価が影響を与えており、【活動性】と【個人的親しみやすさ】を評価する際には、「プロミネンス」への評価が影響を与えていることがわかった。このことから、日本語教師が韓国人学習者の印象について評価をする際には、「プロミネンス」の影響がもっとも大きいことが示唆された。

これに比べ、韓国人学習者が【個人的親しみやすさ】を評価する際には、「摩擦音」への評価がもっとも高い影響を与えており、【社会的望ましさ】を評価する際には、「長音」への評価が、【活動性】を評価する際には、「アクセント」への評価がもっとも高い影響を与えていることがわかった。このことから、韓国人学習者が韓国人学習者の印象について評価をする際には、「摩擦音」「長音」「アクセント」の影響がもっとも大きいことが示唆された。

第11章では、これまでの分析のまとめ、プレゼンテーションとして最も高い評価を得たものと最も低い評価を得たものとを日本語教師と韓国人学習者との間で比較対照した分析と日本語教育への提言を行っている。プレゼンテーションで最も高い評価を得たものの評価は日本語教師と韓国人学習者とも同一であり、高い評価の項目についても同様であった。それに対し、低い評価を与えたプレゼンテーションは日本語教師と韓国人学習の間で大きく異なっており、日本語教師は途中で話を区切ることや間の取り方が悪い場合に低い評価を行なう傾向があるのに対し、韓国人学習者は摩擦音などについて正確な発音できていない場合や、体の向け方や表情など非言語的項目が良くない場合に低い評価を与える傾向が見られた。

最後に日本語教育への提言として、日本語教師と韓国人学習者では、評価の観点が異なる場合があり、言語の教師はそれぞれの観点を理解した上での指導やアドバイスを行うべきだとし、異なっている点を具体的に示している。

#### 4. 審査結果

本論文の公開審査は、2019年2月22日（金）午後2時～4時、本部棟大会議室において行なわれた。

近年日本語教育では日本語学習者の口頭能力における評価研究が注目を浴びている。評価研究は、教室内で日本語教師から受けるものが主流であったが、1990年代後半には会話

授業のシラバスには円滑なコミュニケーションを支えるさまざまな要素が適切に取り込まれる必要があり、シラバス構築のためには日本語教師のみならず一般日本人を含めた評価研究が行なわれるようになった。また、学習者の相互評価という観点からの研究も行われるようになっていく。

2000 年代に入ると、日本語学習者の言語運用能力だけでなく、印象に関する次元を含めた評価も重視され研究が進められてきている。これらの研究は日本語学習者の言語運用能力の正確さや流暢さ、親しみやすさといった個々の評価観点や、日本語運用能力にのみならず、表情や身振り手振りといった非言語行動や、対人印象までも含めた研究が行なわれるようになってきた。

本研究は、上記のような先行研究の流れの上で、韓国人学習者の日本語によるプレゼンテーション場面を刺激ビデオとし、日本語教師と韓国人学習者からの評価がどのような異同を見せるかを、綿密なアンケート調査から得点を得て、因子分析や重回帰分析など統計的手法を用いて行った意欲的なものであるといえる。

分析の結果において、プレゼンテーションに対する評価は、日本語教師よりも韓国人学習者の方が有意に厳しく、またその評価の言語的な面を分析すると、日本語教師がプロミネンスを重視しているのに対し、韓国人学習者はより個別的な発音、例えば摩擦音やアクセントなどを重視するという結果が得られている。

対人印象から見ると、因子分析の結果、日本語教師・韓国人学習者とも【社会的望ましき】【個人的親しみやすさ】【活動性】という 3 種の基本的な認知構造を有しているが、日本語教師の場合は【社会的望ましき】、韓国人学習者の場合は【個人的親しみやすさ】に重きを置いた評価をしていることが示されている。

上記のようにいくつかの新しい知見が得られた研究ではあるが、問題点も指摘されている。まず、刺激となったビデオの素材が 6 種類あり、内容が統制されたものではないので、プレゼンテーションの内容的な面白さ、興味深さという基本的な点について分析が十分行われていないこと、また、プレゼンテーションに対する評価を行った日本語教師と韓国人学習者の評価についての認知構造については相違もあるので、その後の詳細な数量的分析による結果には説明できる範囲に限界があるのではないかと、また、韓国人学習者の相対的に厳しい評価は、学習者という集団によるものなのか、文化差によるものなのか、多元的に分析する必要があるのではないかなどである。

このようにいくつか問題点を指摘することはできるが、公開審査において論文提出者の全は問題点については的確にとらえ、今後の課題としての方向性を示すなど高い見識を有していることが示された。

以上から審査員一同は、全娟妹に博士（日本語教育学）の学位を授与することが適当であると判断した。